

# 有機化学に魅せられて

部会名：化学系薬学部会



森崎一宏

Kazuhiro MORISAKI

北海道大学大学院薬学研究院  
精密合成化学研究室助教

学部4年生の春、九州大学大学院薬学研究院で当時発足したばかりの大嶋孝志先生の研究室の門を叩いた。すぐに、有機化学の虜になった。ピカピカの試験管のなかで、自分で調製した触媒と原料基質を混ぜる。長い宇宙の歴史のなかでも一度として触れ合ったことがない化合物同士が今、目の前で化学反応を起こす！そんなことを考えながらフラスコを眺めるだけで胸が高鳴った。頭のなかで思い描いた新規化学反応が進行し、望みの化合物が得られたときの高揚した気持ちは今でも忘れられない。フラスコと所望の化合物があれば、すぐに作業仮説の検証ができる有機化学の明瞭さと迅速性が楽しくて仕方ない。さて、このたび光栄にも「期待の若手」への寄稿という機会をいただいたわけだが、単に楽しく研究を行ってきた筆者は研究者としての矜持<sup>きょうじ</sup>について熟考してこなかった。しかし、あえて一点挙げるとすれば、いわゆる「流行り」の研究課題を意図的に避けてきたことであろうか。誰かが見つけた金鉱脈(とされる場所)に群がるのではなく、他の人が見向きもしなかったような荒地の可能性に目を向けたい、と思ってきた。これは筆者が前職 京都大学化学研究所でお世話になった川端猛夫先生(現 国際医療福祉大学 福岡薬学部)の影響が大きいと思う。先生の言葉をお借りすれば、「経済性を追求する研究ではなく、文化的な研究を」と言うことになるだろうか。Culture(文化)という言葉は、ラテン語の colere(耕す)に由来するとされる。数字を求めて既存領域から“exploit”するような研究ではなく、まだ誰も歩いたことのない場所を“cultivate”するような研究をしたい。ありがたいことに、挑戦的研究を歓迎してくださる佐藤美洋先生のもと、意欲あふれる学生たちと研究する環境に現在も恵まれている。これからも、流行りや競争から少し距離をおきつつ、フラスコのなかの分子たちに思いを馳せながら、自分自身そして学生が心からワクワクできる化学反応を探求し続けていきたい。

キーワード 有機化学, 自己紹介

Copyright © 2026 The Pharmaceutical Society of Japan

期待の若手

若手研究者の紹介